

みんなのさといへ。

いつでもおいで。



「日雇い労働者の街」、釜ヶ崎。
子供たちの居場所の原風景を映す
ドキュメンタリー映画。
「上映」と「監督講演」の会、開催。

第18回 那須フロンティアフォーラム～障害の枠を超えて～

2019.1.19(土)
13:00-15:30 (12:15開場)
那須塩原市 三島ホール

事前申込不要・全席自由席(定員:350名)
※座席数の都合上、満席の場合はご入場をお断りさせていただく場合がございます。ご了承ください。

★福祉音声ガイド、字幕、手話通訳、託児あり
※託児をご希望の方は事前申込みをお願いいたします。

参加無料◎

check! さとにきたらええやん

【主催】NPO法人那須フロンティア 【共催】那須塩原市

【お問い合わせ】NPO法人那須フロンティア 地域生活支援センターゆずり葉(日曜・月曜休み)

☎0287-63-7777

✉frontier@io.ocn.ne.jp

■映画の舞台 — 「釜ヶ崎」と「こどもの里」

【釜ヶ崎】

◎高度経済成長を支えた、国内最大の日雇い労働者の街

大阪市西成区にある、日雇い労働者らが集う国内最大規模の街。

「あいりん地区」とも呼ばれ、労働者向けの簡易宿泊所(ドヤ)が軒を連ねている。

高度経済成長期にはたびたび労働者たちによる暴動(実際は差別に対する抗議行動)が発生する等、治安の悪いイメージがあった釜ヶ崎。長年、土木・建設現場に働き手を送り出してきたが、昨今では労働者の高齢化、不況による求人の激減、路上生活者や生活保護受給にまつわる問題など、さまざまな課題が山積みとなっている。

しかし、地域に多数あるNPO団体や宗教団体による炊き出し等が頻繁に行われるなど、地域のネットワークが今現在も色濃く残る街でもある。



【こどもの里】

◎釜ヶ崎の子どもたちに健全で自由な遊び場、居場所を

1977年、釜ヶ崎の子どもたちに健全で自由な遊び場を提供したいとの思いから、子どもたちの遊び場(ミニ児童館)「子どもの広場」としてスタート。1980年に現在の場所で「こどもの里」を開設以降、放課後の子どもたちの居場所としてだけでなく、生活の不安定さに揺れる子どもたちや親たちのサポートをし続けている。家庭環境によって行き場のない子どもたちのニーズも高まり、緊急一時保護の場、生活の場の提供も。2013年、大阪市の「子どもの家事業」を廃止を受けて存続が危ぶまれたが、「特定非営利活動法人(NPO法人)こどもの里」を設立し。現在も変わらず、子どもが安心して遊べる場の提供と生活相談を中心に、常に子どもの立場に立ち、子どもの権利を守り、子どものニーズに応じる、をモットーに活動を続けている。

わたしはあなたの味方やで！ 現在求められている“子どもたちの居場所”の原風景

人と人が関わり合うコミュニケーションが希薄になり、地域のコミュニティが失われつつある現在の日本。大阪市西成区釜ヶ崎は今でも日雇い労働者が集う喧噪の街ですが、昨今ではあまり見られない、地域内のコミュニケーションが現存している街でもあります。「こどもの里」はそんな釜ヶ崎の子どもたちにとって大切な“居場所”です。子どもたちを巡る状況が急激に変化している今、あらためて注目されている「こどもの里」の取り組みは、これからの社会を歩む私たちに子どもも大人も安心できる“居場所”とは何か、問いかけています。



**西成・釜ヶ崎＝危険な街という偏見を持っていた。
「何でこんなところで子どもの施設をやってるんですか？」**

『さとにきたらええやん』(2015/日本/100分/カラー/16:9/5.1ch/DCP)

監督・撮影:重江良樹/音楽:SHINGO★西成

編集:辻井潔(『隣る人』『イラク チグリスに浮かぶ平和』)/音響構成:渡辺丈彦(『ルンタ』『妻の病 レビー小体型認知症』)/プロデューサー・構成:大澤一生(『隣る人』『フリーダ・カーロの遺品 -石内都、織るように』)

制作協力:神吉良輔(ふとっちょの木)、五十嵐美穂、上田昌宏、吉川諒/機材協力:ビジュアルアーツ専門学校大阪/特別協力:小谷忠典/助成:文化庁文化芸術振興費補助金/企画:ガーラフィルム/宣伝・配給協力:ウッキー・プロダクション/製作・配給:ノンドライコ

HPアドレス:<http://www.sato-eeyan.com>